

二〇一九年度 鉄道交通講演会を開催

日建連は二月十三日、東京・大手町の経団連会館において「二〇一九年度鉄道交通講演会——二十一世紀の環境新時代を拓く——」を開催した。鉄道の建設・整備や建設業界に対する理解を深めるために開催している鉄道交通講演会も、今年で一六回目となる。

はじめに、宮本洋一副会長・鉄道建設本部長が、「昨年は、三月におおさか東線が全線開業し、十一月に相鉄・JR直通線が開業したことで、大都市における鉄道ネットワークが一段と強化された。一方で、昨年も大きな台風が発生し、鉄道も被災した。重要なインフラである鉄道の防災・減災対策、そして新たな鉄道ネットワークの構築は、国土強靱化のための重要な施策である。日建連としては、今後も引き続き鉄道建設の一翼を担うこと

で、国土強靱化と経済の発展に貢献していきたい」と挨拶した。

今回の講演は、作家・エッセイストで日本ペンクラブ会員の茶木環氏が「文学が映すインフラの光景」と題して、鉄道と文学の関連性について、夏目漱石の「こころ」と芥川龍之介の『蜜柑』を紹介し、「鉄道は時間・場所・人を繋ぐものであり、心情や情景描写の変化を可能なものとして。今後、リニア中央新幹線の開業等がもたらすスーパー・メガリージョン構想により、時間と場所から解放されて様々な価値観や選択肢のもとに多様な暮らし方や働き方が可能になる。文学においてもどのような繋がりが可能になるのか楽しみである」と述べた。

更に、災害と文学の関係について触れ、「東日本大震災後、受け手である読者の共感や思考が深まった

「震災後文学」という概念が誕生した。読者がより能動的に災害と人間について知ることによって災害の風化を防ごうとしている。震災後や災害後に終わりはない」と語った。

次いで、政策研究大学院大学教授で東京大学名誉教授の家田仁氏が「三・一一東日本大震災復興一〇年」我々は何を学んだのか」と題して、東日本大震災からの復興の過程において学んだ教訓や課題を七項目に分けて紹介し、「自然災害における安全確保について、『完璧は期せないと現実』を国民全体が共有できたことは大きな一歩である。構造物が被災した場合の危険度により二段階に分けた災害対策を想定することが重要である」と説明し、「鉄道を含めた各種施設が機能不全に陥る際の約六割は周辺機器や設備等の破損であり、注意すべきリスクは周辺にある。しかし、鉄道は法律により周辺に危険を及ぼす可能性のある私有地等が存在しても事前に対処することができないことが多い。現在、国交省の鉄道局とともに法制度改革に取り組んでいる」と語った。



政策研究大学院大学の家田仁教授



作家・エッセイストの茶木環氏

最後に、伊藤泰司鉄道工事委員長（鉄建建設㈱社長）が、「この講演会は、講師の先生方の深い見識と熱い想いの中で、毎年お話しいただいている。本日の講師のお二人と熱心にご聴講いただいた皆様に感謝申し上げます。引き続き日建連の活動および鉄道建設に対するご支援、ご指導をお願い申し上げます」と閉会の挨拶を述べた。

当日は、日建連の会員企業や鉄道工事の関係者ら約四〇〇名が聴講し、茶木氏と家田氏の講演に熱心に聞き入っていた。講演会終了後、引き続き懇親会が催され、盛況裡に終了した。

二〇一九年度 海洋安全表彰式を開催

日建連安全委員会（乗京正弘委員長（飛鳥建設㈱社長））海洋安全部会は三月十一日、東京・中央区の東京建設会館において二〇一九年度海洋安全表彰式を開催した。海洋安全表彰は、海洋工事にお

いて安全確保、環境保全、公害防止対策等に優れ、他の模範となる企業体等に与えるもので、今年度は茨城港常陸那珂港区の「次期処分場護岸築造工事（北その1）」を施工している東亜・大林・菅原特定建設工事共同企業体護岸築造JV作業所が受賞した。当日、乗京委員長から小松隆洋所長に表彰状が手渡された。

次期処分場建設事業は、茨城県が事業主体となり国土交通省関東地方整備局と協力し、中央ふ頭地区に近隣の石炭火力発電所から排出される石炭灰の最終処分場を新たに建設するための公有水面埋立事業であり、護岸築造工事は、外周部に遮水構造の護



乗京委員長から表彰状を受け取る小松所長

岸を築造するものである。全周の護岸築造工事区域は、複数の工区分けられ九企業体により施工が行われた。計画当初から協議会が組織され、全体としての作業工程、作業船舶の運航調整等が図られるなかで工事は進められた。工事区域は、外洋に面しており、沖防波堤があるものの、回り込むねり、風向きによる風浪の影響、台風の影響による作業中断等を受けながらの施工であった。

今回、受賞した護岸築造JV作業所は、このような状況下で、四年以上にわたる工事を無事故で進めるとともに、築造護岸上の開口部全体をメッシュ構造で覆い通路とするなど、適切な作業環境を整備し、緊急事態に即した複数の連絡体制を構築した。また、各種緊急訓練の実施、高い環境意識による対策、活発な組織内のコミュニケーション維持への取り組みが評価され、今回の受賞につながった。

表彰状授与後、乗京委員長は「四年以上にわたる長い工期で、施工条件が次々と変わる厳しい気象・海象条件のなか、工期管理な



記念撮影の様子。前列中央で表彰状を持っているのが小松所長

ど様々な工夫を凝らし難作業に当たられた所長以下全員の努力にあらためて敬意を表したい」と受賞した現場で働いていたすべての人たちの功績を讃えた。そして「工事に携わった人は既に次の現場に移っているかもしれないが、この経験を生かして引き続き頑張ってもらいたい。そして、社業の発展と社会資本整備の推進に貢献していただきたい」と述べた。

乗京委員長の挨拶の後、小松所長を囲んで記念撮影を行い、表彰式は終了した。